

## 現代文化と自我の変容Ⅷ

—— SANAA と現代建築 ——

井上 文人

### 1. はじめに

本稿が掲げる〈現代文化と自我の変容〉研究は、現代日本の中で進行する〈現代文化の変容〉という事態の解明を通じて、その事態の中で進行している〈自我の変容〉を十全に解明することを目的とする系統的研究である。本稿は、現代文化の中の〈現代建築〉を研究対象とする。

〈現代建築〉は、現代日本における〈現代文化と自我の変容〉研究にとって極めて重要である。「現代建築」において、〈建築とは空間構築である〉ということによって、それまでの〈建築と自我の関わり方〉が変容しているからである。この〈関わり方〉の変容は〈建築の在り方〉を変容させ、それは、また、〈自我の在り方〉をも変容させているのである。

### 2. 「現代建築」と〈建築観の変容〉

#### (1) 従来の「建築観」

建築とは、建築物を構築すること、または、建築によって構築された構築物、と定義される。『広辞苑』には次の様に記されている。

「建築」とは「家屋・ビルなどの建造物を造ること」<sup>(1)</sup>

『広辞苑』によれば、建築とは、建築物を建築する、ことである。最新の『デジタル大辞泉』には、さらに詳しく、次の様に記されている。

「建築」とは「家屋などの建物を、土台からつくり上げること。また、その建物やその技術・技法」のこと<sup>(2)</sup>

通常は、「建築」という語は、〈建築物を建築すること〉か〈建築された建築物〉の二つのいずれかの意味で使用されることが日常の語法である。「建築」の語の使用の際の関心は「建築物」に集中している。これが「建築」という語が体現していた建築というものについての従来の〈建築観〉の内実であると思われる。

しかし、「建築」によって実現されるものに意識的になる時、そこには語の従来の理解とは異

なった相貌が現れてくる。それは、「建築」というものが意味するのは、〈建築物〉そのものより、その〈建築物によって構築される空間〉であり、その建築物によって構築される〈建築物の空間の構築〉のことである、ということである。

「建築」の意味するものに意識的である時、「建築」の語を使用した表現はその意味を明示する。「建築」の語が体现する「建築観」は明確に変容しているのである。

## (2) 建築観の変容

「アトリエ系建築設計事務所」<sup>(3)</sup>によって設計された「デザイナーズマンション」の賃貸物件を扱う会社は、自らの社名を「空間建築ファクトリー」と称している<sup>(4)</sup>。自ら扱う「不動産物件」の特徴を「おしゃれ+心地よい空間」と性格付け<sup>(5)</sup>、その物件を「空間建築」と呼んでいる。

その「アトリエ系建築設計事務所」の一つである「アトリエ・ワン」<sup>(6)</sup>の塚本由晴は、建物の「リノベーション」<sup>(7)</sup>を、従来の学校や病院、美術館、図書館等の建物の「施設型の空間」構築と区別して、「非施設型の空間」構築と位置付け、推奨している<sup>(8)</sup>。

「空間の構築」という建築観は、建築の「アトリエ系建築設計事務所」ばかりではなく、その対抗系とされる建築の「組織系建築設計事務所」の認識でもある。例えば、「竹中工務店」は、自らの企業課題の表明である「ソリューション」の「建築」において、「健康な生活・社会を支える空間づくり・まちづくり」を公言する<sup>(9)</sup>。大手の建設会社や設計事務所の扱う「空間」は、個々の建築物の建築空間ばかりではなく、それらを超えて、多数の建築物を含みこむ「まち」という空間を対象とするのである。その規模の「空間」を全体として対象とする「空間の構築」が課題となる、というのである。

組織系事務所の「日建設計」の亀井忠夫は、建築設計の前段階としての「プロジェクト・マネジメント」について語る<sup>(10)</sup>。それは、個々の建築物を超えた「複合開発プロジェクト」のマネジメントであり、このプロジェクトの初期設定段階での「建築設計者の視点」の必要性について言及する。この時には日建設計の「執行役員・設計部門代表」<sup>(11)</sup>として語っていた亀井忠夫は、その後、日建設計の「代表取締役社長」となり、社長としての「ご挨拶」の中で、あらためて「社会環境デザイン」について語る<sup>(12)</sup>。「社会環境デザイン」とは、「社会環境デザインの先端を拓く専門家集団」としての「日建設計」と表現されるように、自らの「企業理念」<sup>(13)</sup>の中に位置付けなければならない建築設計企業を中心課題である。この「社会環境デザイン」全体を貫通する日建設計の「建築設計者の視点」とは、「人々の生活から都市までを連続した空間としてデザインします」<sup>(14)</sup>という空間構築の視点に他ならないのである。

以上の、建築による空間構築という建築観に関わって、建築家達の空間表象の技法を対象にして、新しい空間表現の可能性を見ようと『建築以前、建築以後』展を企画したキュレーターの鈴木布美子は、建築による空間構築そのものについて次の様に書き始める。

「建築は多様なコンテキストのなかで空間を生産すること」<sup>(15)</sup>であり、「空間こそが建築の最も純粋な属性である」という認識はモダニズム以降急速に一般化した」が、「すでに現在、空間という概念は建築家の専有物ではなく」、「アート、建築、デザインなどの脱領域的な創造活動が

常態化する」中で、「新しい空間表現の可能性」が見えてくるはずだ<sup>(16)</sup>、と。

空間表現における、「表現」それ自身の新しい可能性という問題の帰趨もさることながら、この「モダニズム以降急速に一般化」したとされる〈建築とは空間構築である〉という〈建築観の変容〉によって<sup>(17)</sup>、そもそも如何なる事態が〈現代建築〉それ自身において進行しているのだろうか。

### (3) 建築観の変容の意味

〈建築観の変容〉とは、簡潔に定式化すれば、〈建築とは建物構築である〉という建築観（「建築」というものの理解）から、〈建築とは空間構築である〉という建築観への変容、のことである。

〈建物構築〉から〈空間構築〉への〈変容〉の実質的内実の要点は、建物の実際的な構築に関心が存していたのに対して、建物の構築とは、空間の中に新たな建築物が構築されることによって、その空間が新たに構造化される、ということに関心が変化する、ということにある。関心の在り処の変化とは、「建築」というものの理解の変化として、即ち、〈建物の構築〉という理解から、その建物の構築によって実は新たに〈空間の構築〉がされているということの理解へ、という理解の変化に他ならない。この建築についての「理解」の変化が〈建築観の変容〉である。

〈空間構築〉とは〈空間の構造化〉になる。新たな建築物が空間の中に構築されることによって、建築物内部と外部が新たに構造化される。その意味で〈空間構築〉は〈空間の構造化〉である。

この〈空間の構造化〉は〈空間の有意味化〉になる。新たに構造化された空間は、その構造化によって、新たな意味を有するようになる。その意味で〈空間構築〉は〈空間の有意味化〉である。

空間の〈構造化〉や〈有意味化〉の構成は、主体や対象の設定の仕方によって「人間」「社会」「自然」等に変化するが、原理的に最も重要なのは、言うまでもなく、〈構造化〉や〈有意味化〉を惹起する「建築」を行う《主体》としての〈人間＝自己〉である。

この〈自己〉は「建築」といったいどうにかかわっているのか。

## 3. 「現代建築」と〈自我〉

### (1) 「現代建築」と〈私的なもの〉

鷺田清一は、〈現代建築〉が人間にとって持つことが出来る意味を次の様に書いている。

「いま、建築は、住居という私的空間そのものの再編成というかたちで、人間にとって私的なものがもつ意味を深く問いだしているようにみえる」<sup>(18)</sup>

「住居という私的空間そのものの再編成」とは、従来の「住居」を可能にして来た「家族」というものの「モデル」の〈変容〉という事態に直面することによって招来した事態である。鷺田

の問題意識の射程は、このような状況の中で、あらためて、現代において、「人間にとって私的なものがもつ意味」とは何であるのか、という根本的な問いを提示することにある。しかし、「建築」それ自体は、〈住居という私的空間そのものの編成〉によって、人間に「私的なもの」の成立を可能にしてきたのである。

「建築」によって作り出される「住居」という「私的空間」とは、一体、人間にとって何であったのか。

## (2) 「建築は生きることの唯一の拠点」

山本理顕は原広司の建築思想を次の様に紹介している。

「シンポジウム「311ゼロ地点から考える」で原広司さんは、「建築は生きることの唯一の拠点である」ということを言っていて、まったくその通りだと思いました。これが自分の帰属する空間であると感じる感覚は、誰もがやはり持っていると思うんですね。自分がある空間に帰属していて、初めて自分がそこにいる、そこで生きているという感覚を得ることができるような場所を、建築はつくることができるのではないか。そういう意味で原さんは「建築は生きることの唯一の拠点である」と言っていました」<sup>(19)</sup>

人間にとって「建築」は本質的要素である。「建築」によって創造される空間によってのみ、人間は自己の帰属する人間としての空間を獲得する。それは、人間にとって〈人間としての《自己》〉そのものの獲得、に他ならない、と言ってよいものである。

## (3) 建築と自我

### ① 建築としての自己表現

〈建築と自我〉の密接な関係について明確に語るのは井上章一である。井上は、『現代の建築家』の「あとがき」冒頭の「日本の自我を考える」と明示された節で、次の様に語り始める。

「日本人は、近代的な自我をはぐくんでこなかった」「自我をおさえつけてしまう傾向が強い。日本の社会科学は、しばしば以上のような口吻をもらしてきた」「だが、住宅地の光景を見ると、まったくちがう様相も目にはいる。街並みからうきあがった、とっぴな形の住宅は、日本のほうがずっと多い。ヨーロッパの住宅地では、たいていの家が街並みのなかにとけこんでいる」「建築的な自我は、全体のなかで抑制を余儀なくされている。いっぽう、日本は、その自我がうけいられる社会を、つくってきた。建築に関しては、日本こそが、近代的な自我を発達させてきたのである」<sup>(20)</sup>

この〈自我〉が〈建築〉を構築する。

「日本の都市には、周囲との調和など歯牙にもかけない建築が、たくさんある。地権者と建築

家が、まわりの空気など読まず、自我をぞんぶんに発揮させてきた。そんな建物と市中であえる度合いは、欧米の都市よりはるかに高い」「建築にたくされた自己主張は、日本のほうがはるかに強い」<sup>(21)</sup>

〈建築〉は〈自我〉による〈自己表現〉として構築されるのである。

## ②建築家としての自己表現

内藤廣は、建築として〈表現〉されるべき〈自己〉の探究を「自分探し」として語る。それは、2011年の「3.11」の震災に直面後に、自己批判を含めて次の様に表現される。

「建築という文化は、永らく小さな物語りづくりに拘泥してきた。自分探し、それも建築家自身の自分探しとアリバイづくり。そのための自由を追い求めてきたように思える」<sup>(22)</sup>

建築家の自らの建築を創り出すことによって遂行されてきたその「自分探し」そのものの営み自身は、極めて困難であるとともに、自らの「建築家」としての存在そのものの根底に関わる最も本質的な課題である。それは、最も言語化し難いものである。内藤は書く。

「いかに論理化しようと、いかにシステム化しようと、創作の最前線は自らの無意識をまさぐるところからしか発せられない。クリエイティビティの純度が高ければ高いほど言語化しにくい本質を抱え込むことになるのだ」<sup>(23)</sup>

建築家は、この、自らの「無意識」をまさぐり、建築へと「言語化」していく「自分探し」を如何に実践するのか。

## ③安藤忠雄と自我

安藤忠雄は自らの建築家としての「発想の源」について次の様に書く。

「建築の発想の源は、過去に訪れた場所の風景、人やモノとの出会い、といった自身の身体化された記憶の中にあることが多く、言葉にするのが難しいのですが、仕事のスタートは必ず、“場所を読む”ことから始まります」「それぞれの場所には、必ずそこにしかない個性があります。その本質を注意深く読み取り、新たな建築によって顕在化する—この場所との対話を普遍のテーマとして、ずっと仕事に取り組んできました」「一口に場所の個性といっても、その内容は、土地の歴史や形状、植生から、その中にある既存の構築物、そこから見える風景などさまざまであり、またそれを建築化する方法も、人工と自然の調和を目指すものであったり、逆にその対比を強調するものであったり、道はひとつではありません。ですが、いずれの仕事も目指すところは同じく「その場所にしかできない建築」への挑戦です」<sup>(24)</sup>

「その場所にしかできない建築」を、その「場所」に「読み取り」、構築するのは自分自身である。それは、その「場所」の〈自我〉による〈表現〉である。「建築家」とは、その任を可能にする人間存在である。

しかし、「建築家」は、人間存在として、表現すべき自己の探究において、〈建築家としての自己〉と〈人間としての自己〉の相克に遭遇する。

#### ④伊東豊雄と自我

「建築家としての自分」と「ただの一人の人間としての自分」の相克について率直に語るのは伊東豊雄である。2011年の東日本大震災後の仙台市宮城野区における「みんなの家」の建築をめぐる体験について伊東は語る。

「一方に建築家としての自分がいて、もう一方にただの一人の人間としての自分がいて、その二人の自分の間を往復していたような気がします。つまり、建築家としての自分は表現者としての自分でもあるわけですから、伊東豊雄としてどのような表現ができるのかということにこだわってきました。もちろん、どうしたら人々が集まり、どうしたら自然と人々の関係を築くことができる建築をつくれるのだろうか、十分に考えてきたつもりです。それでも最終的には、個のアイデンティティとして表現することにこだわっていたと思います」<sup>(25)</sup>

伊東の言う「建築家としての自分」と「ただの一人の人間としての自分」との相克は解決されるのか。その解決は、「建築家」としての「個のアイデンティティ」の「表現」が、まさしく、「どうしたら人々が集まり、どうしたら自然と人々の関係を築くことができる建築をつくれるのだろうか」という問題の解決の提示である、という時に他ならない。この時、〈相克〉は〈超克〉される。そして、それは、また、妹島和代の建築を支える建築思想に他ならない。

「建築家」によって構築されるべき「建築」とは、〈人々が集まり、自然と人々の関係を築くもの〉に他ならない。この「建築」は、「建築家」の〈自我〉による〈自己表現〉に他ならない。

### 4. 妹島和世の自我

#### (1) 妹島和世の「建築史的位置」

妹島和世は磯崎新によって建築史的に最も現代を体現する建築家と指定されている<sup>(26)</sup>。

#### (2) 妹島和世の建築

長谷川祐子は、妹島和世と西澤立衛による建築ユニットである SANAA<sup>(27)</sup>の創る建築について端的に次の様に書いている。

建築とは「空間の構築」である<sup>(28)</sup>。



そして、その「空間」の意味について次の様に書く。

「SANAA の建築は、建物ではなく、「場」をつくっているとよく言われる。それは、そこにいる人々を触発する場であり、交渉、交換を活性化するものである」<sup>(29)</sup>

人間の活動を活性化する「場」とは、「建築」によって如何に可能になるのか。

### (3) 妹島和世の建築思想

妹島は、自らの日本女子大学時代の恩師富永譲の「家庭」という日本語は「家」と「庭」の「共存」という考え方を体現するものであるという指摘を受け、次の様に語る。

「そのような考え方には初期のころから興味がありました。それは庭についてのというよりも、庭がそのまま建築につながる考え方です。なんとなく固定化された空間的なものではなく、どんなものも包含できる一さまざまな年齢の人だったり、いろんな人がちがう目的をもって一緒にいるような一感じですね。それぞれにプライバシーが保たれながら、でもなんとなくつながりも感じられるような。それはいくつもの場所がつながっているという感じで、そういう建物がつくりたいと思っています」<sup>(30)</sup>

「建物」は、そこに住む人間達の〈人間関係の在り方〉の表現である。それは、妹島のすべての建築作品を支える根本的な建築思想である。その建築思想を実現するための「建築のつくり方」について、妹島は続けて次の様に語る。

「建物のなかにいても外とのつながりが感じられるために建築の境界をどう広げればいいのかということを、私はずっといろんなかたちで考えていました。外の空間と一緒になってその場所をつくる、あるいは外の空間と重なり合うようなものにしたいと思っていたんですね。外での経験と内での経験がどこかで一致するというか……。いろんな時間の積み重ねによって場所そのものが固有性を持つわけですから、そういうものに触れられる建築のつくり方ができたとき、内と環境と建築が合わさったと言えるんじゃないかと思ったんです」<sup>(31)</sup>

この〈「内と環境と建築が合わさった」建築〉は如何なる「住みごこち」を可能にするのか。

### (4) 妹島建築の「住みごこち」

松本隆は、妹島和代と西澤立衛の SANAA によって設計され、「M-HOUSE (1997)」と通称される自らの住宅建築について次の様に語っている。

「住んでて、面白いんですよ。壁は全部ガラスで半透明で、表の通りを誰かが通ると、なんとなく気配を感じることができる。ところが、向こうからはこっちは絶対見ることはできない」。

江戸の頃の家って「すごく開放的だったと思うのね。町人が住んでいた長屋なんて、横丁に面していて、わりとオープンだったわけだし。本来、日本家屋って、障子や襖を全部取っちゃえば、縁側から反対側まで全部吹き抜けてしまうわけだから。「M-HOUSE」にも、それに似た開放的なところがある。半透明なフィルムが貼ってあるから外から見えないだけで。だから、泥棒がすごく入りにくい家だと思う。マンションだと、外の世界と内側がコンクリートの壁で仕切れちゃって、守られてるんだか閉じ込められてるんだかわからない感覚があるから。そういう意味では、守られてるんだけど、外と繋がっている感じが「M-HOUSE」のいいところだね」<sup>(32)</sup>

妹島建築が実現したこの「守られてるんだけど、外と繋がっている感じ」という妹島建築の住居の本質について、妹島自身、次の様に語っている。

「都市の中にいながら、プライベートな空間も作れている。その混ざり加減が、私たちとしてはわりといい感じになったと思っています」<sup>(33)</sup>

この「都市の中にいながら、プライベートな空間も作れている。その混ざり加減」が「今までとは違うプライヴァシーを感じる空間」を可能にし、〈パブリックとプライベートを統一した空間〉を実現しているのである<sup>(34)</sup>。この「守られてるんだけど、外と繋がっている感じ」は、松本隆の作詞によって創られる詞と風景の関係にも共通するとされる<sup>(35)</sup>。「M-HOUSE」は、松本によれば、MoMA（ニューヨーク近代美術館）で、「プライベート・ハウス」ではなく、「アン・プライベート・ハウス」として、展覧会の際に模型展示された、とされる<sup>(36)</sup>。

## (5) 妹島建築の意味

SANAAとして妹島和代とともに一緒になって建築設計を行ってきた西澤立衛は、妹島の建築設計の意味を次の様に語る。それは、妹島自身が自らの建築設計について語り、それを観客として西澤が聞く、という稀有な状況の中での西澤による貴重な分析である。西澤は語り始める。

「妹島さんのレクチャーを観客として聞いたのは本当に久しぶりです。十五年ぶりくらいでしょうか。僕が面白いと思ったことが、みなさんとどこまで共有できるかわかりませんが」「まず強く感じたのは」「妹島さんはいろいろな建物をつくった経験があると思うのですが、どのプロジェクトであってもゼロから考えていくような感じがすごくあります。それも、個人の実感、身体性というか価値観というのか、そういった妹島さん個人の価値観というものが創作の中心になっている」「非常に身近で妹島さん自身の視点から創作が始まって、センター配置が出てくる。要求条件、プログラム、敷地条件、環境というようなことから設計が始まるんですが、それらのとらえ方が非常に身体的というか、自分の実感というものがつねに中心にある。ただ、個人の思いということから始まってはいるけど、最終的には個人を超えて現実の都市風景に対する批評にもなっている」「そういうことが言葉ではなく、幾何学によってなされ



ている」<sup>(37)</sup>

この、〈自己〉を中心とした SANAA の建築設計の原理について、西澤は次の様に説明する。

「妹島さんと僕と一緒に設計するときの方法論として、二つの重要な問題があって、ひとつはプログラムの問題、つまり建物をどう使うかという問題で、もうひとつは建物と周辺との関係という、環境の問題です」「その二つをひとつの問題としてとらえながら建築をつくれないうかと思うんですね。プログラムは建物内部の問題で、環境は外部の問題というように、それらがあたかも別々の問題であるかのように扱うのではなくて、その二つの問題が根本的にはひとつの問題であるような、そういう建築のあり方みたいなものを求めている」<sup>(38)</sup>

この〈内部と外部の二つの問題を一つの問題として解決する SANAA の方法〉を可能にするのは、〈公共性のある主体性〉であり、その〈主体性〉と〈公共性〉の完遂を可能にするのは、《主体》自身が自ら変わっていくことによってである。妹島和代に先行する伊東豊雄について山本理顕は次の様に指摘する。

「さまざまな要件によって、建築家の求めるものを歪ませられたということではなくて、伊東さん自身がつくっていくプロセスのなかで変わったからこそ、建築が魅力的になっていったと思うんです。当初のアイデアを自分の中で閉じないで、自分自身が変わりながら外に対して共感を求めていく」「いかに主体的でかつそこに共感を得られるものをつくっていけるのか」、それがわれわれの最大のテーマです。<sup>(39)</sup>

この、伊東についての山本の指摘は、言うまでもなく、妹島への、そして、SANAA へのそれである。

## 5. おわりに

妹島和世の SANAA によって、建築の内部と外部の問題が一つの問題として解決される。それが〈人々が集まり、自然と人間関係を築く建築〉＝〈内部と外部を統一した建築〉を可能にする。そして、それは《自我の変容》によって可能になるのである。

## 注

- (1) 新村出編『広辞苑・第四版』岩波書店、1997年、714頁。
- (2) 「建築」『デジタル大辞泉』〔出典：小学館、2017年8月現在〕コトバンク <https://kotobank.jp/word/>。
- (3) 二川幸夫企画・編集、二川由夫インタビュー『日本の建築家』エーディーエー・エディタ・トリーキョー、2013年、375頁。「アトリエ系建築設計事務所」〔『Wikipedia』<https://ja.m.wikipedia.org/>〕

wiki/] 参照。

- (4) 『空間建築ファクトリー』 [www.kkf.co.jp](http://www.kkf.co.jp)。
- (5) 「会社概要」『空間建築ファクトリー』 [www.kkf.co.jp/about.htr](http://www.kkf.co.jp/about.htr)。
- (6) 「アトリエ・ワン Atelier Bow-Wow」は塚本由晴と貝島桃代によって1992年に設立された建築設計事務所である〔[www.bow-wow.jp/profile/#top](http://www.bow-wow.jp/profile/#top)〕。
- (7) 「リノベーション (renovation)」とは「既存の建物に大規模な改修工事を行い、用途や機能を変更して性能を向上させたり付加価値を与えること」で、「リフォーム」(「修復」)とは区別される〔「リノベーション」『Wikipedia』<https://ja.m.wikipedia.org/wiki/>〕。
- (8) 塚本由晴「なぜ、今リノベーションが面白いのか」『BRUTUS』マガジンハウス、2015年9月、32～33頁。
- (9) 「ソリューション」『竹中工務店』[www.takenaka.co.jp/sol](http://www.takenaka.co.jp/sol)。
- (10) 二川幸夫企画・編集、二川由夫インタビュー『日本の建築家』エーディーエー・エディタ・トーキョー、2013年、366頁。
- (11) 同前書、364頁。
- (12) 「ご挨拶」「企業情報」『日建設計』[www.nikken.jp/ja/about/firm/index.html](http://www.nikken.jp/ja/about/firm/index.html) (2017年1月1日アクセス)。
- (13) 「企業理念」「企業情報」『日建設計』[www.nikken.jp/ja/about/firm/idea.html](http://www.nikken.jp/ja/about/firm/idea.html)。
- (14) 「建築設計」「各分野からのメッセージ」『日建設計』[www.nikken.jp/ja/about/recruit/department/department01.html](http://www.nikken.jp/ja/about/recruit/department/department01.html)。
- (15) 鈴木布美子「空間の表象をこえて」『建築以前、建築以後』小山登美夫ギャラリー、2009年、2頁。
- (16) 同前書、5頁。
- (17) 例えば、『西洋建築様式史』においては、「初期近代建築」の特徴として「新しい空間構成」が指摘されている〔熊倉洋介他『[カラー版] 西洋建築様式史』美術出版社、1999年、164頁〕。
- (18) 鷺田清一「ウオッチ論調」『朝日新聞』1999年11月25日(木)夕刊。鷺田は、従来の「核家族像」を超えてゆく「非モデル住居論」によって、「建築」は「私的なもの」を「問い直す」と論じている。
- (19) 山本理顕他『OURS TEXT 001 未来の住人のために』nobody編集部、2012年、49頁。
- (20) 井上章一『現代の建築家』エーディーエー・エディタ・トーキョー、2014年、494頁。
- (21) 同前書、498頁。
- (22) 内藤廣「建築・言語なき思想としての表現」『思想』岩波書店、2011年5月、72頁。
- (23) 同前書、70頁。
- (24) 『安藤忠雄展—挑戦—カタログ』安藤忠雄建築展実行委員会、2017年、167頁。
- (25) 伊東豊雄『OURS TEXT 001 未来の住人のために』nobody編集部、2012年、42頁。
- (26) 磯崎新『日本建築思想史』太田出版、2015年。
- (27) SANAA は Sejima and Nishizawa and Associates の略〔『デジタル大辞泉プラス』出典：小学館、コトバンク <https://kotobank.jp/word/SANAA>〕。
- (28) 長谷川祐子「新しい環境、新しい体験のためのポリティクス」『建築、アートがつくりだす新しい環境』株式会社 ACCESS、2011年、12頁。
- (29) 長谷川祐子「立ち去れない場所」『美術手帖』2010年9月、92頁。
- (30) 富永譲編「妹島和世×富永譲」『富永譲・建築の構成から風景の生成へ』鹿島出版会、2015年、171～172頁。
- (31) 同前書、172頁。
- (32) 『松本隆対談集』ぴあ株式会社、2005年、313～314頁。なお、本書は『松本隆対談集 風待茶房 1971-2004』(立東舎)として2017年に再版されている。

- (33) 同前書、313 頁。
- (34) 同前書、319～320 頁。
- (35) 同前書、314 頁。
- (36) 同前書、318 頁。
- (37) Y-GSA（横浜国立大学大学院）編『建築の新しさ、都市の未来』彰国社、2008 年、179～180 頁。
- (38) 同前書、212 頁。
- (39) 同前書、215 頁。

（受理日 2018 年 1 月 10 日）